

園長だより NO71

表現について

保育園の保育内容の基になるものが厚労省より示されている保育所保育指針です。保育について基本的な内容を示し園の実情や特性をいかし保育を進めなさいというものです。

その中で感性と表現に関する領域「表現」があります。

内容を抜粋してみると「感じたこと考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とあります。

ではどのように保育現場で考えていけばいいのだろうか。

一昔前は表現と言えば、単独で音楽リズム、絵画制作と考えられていた。子どもの感性、情緒よりも具体的な指導「〇〇を描くとか〇〇の楽器を演奏する」とか技術の獲得に比重が置かれていた時代であった。

現在は指針で示されたように感じたこと、考えたことを自分なりに表現することを通じて子どもの心を育てていくことに比重が置かれている。

毎日の生活の中で身近な周囲との環境と関りながら心を動かし不思議さ面白さを発見していく生活が望ましいと考えます。

感じる事、考えたこと、5感を通じて心が揺れ動いたこと等の経験を重ね表現力を養い

創造性を豊かにできるのではないかと考えています。

自己がいきいきと自分の存在を実感し安定した心で生活が送れるように心がけています。

「決められたことを 決められたように やっていたら・・・」

大人になり社会に出れば当たり前のように決められたことを理路整然と行うことは当たり前である。

子どもの生活の中でも園生活を営む中で様々な約束ごとなどはあり、生活を維持していくための決まりは多くあります。

子どもの生活の大半は遊びであることは以前にも幾度となく触れていますがその遊び（活動）を事前に大人が決めてしまい、大人の間でその内容を子どもに教え込んでいくだけのものであったらどうでしょう。

感じたこと、考えたことを自分なりに表現できるステージはごくごく狭いものになっていくことでしょう。

絵を描くことひとつをとっても予め決められた内容を子どもに提供して描かせるとしたら、子ども達の十分な表現は期待できないように思えます。※計画的に行う活動もありますが常に子どもの興味、関心、発達に即した内容を考え子どもを中心にすえたものになっています。



右下の画像は3歳児の絵の具を使った遊びの様子です。

子ども達は「素材や道具」に出会い様々な思いを馳せます。

自分自身が動き、素材にアプローチしていく、色がどンドンと広がり色づいてくる。時には友達の様子に刺激を受けて新たな方法を見つけたり、友達との会話から自分を実感でき、より夢中に取り組んだりします。

豊かな表現の源には目の前にある素材や道具との対話があるようにみえます。

この活動で大人（保育士）が（決めたこと）は絵の具で遊ぶことのみ、いざ始まれば子どもの感覚、感性に任せ、子ども達の見せる姿により添っていく。



時に子どもの要求に応答しながら活動を支援する。

決まった課題に向かい合う活動に比べ感じたこと、考えたことを自分なりに現すことができるように思います。



「劇の取り組みから -5歳児より」

12月中旬に5歳児めろん組の劇の会があります。活動に取り組むにあたり大切にしていることは「できるだけ、子ども達で作りに上げていくということです。」

大人が題材を決めて、台本を決め、演じることを教えていくものではありません。

絵本や物語に出会い その題材との対話があり。感じたことやそれぞれの思いが表に出てきます。

素材や道具との対話もあり、お話を基に演じていく（遊んでいく）環境を作っていきます。次第に遊びながら演じていく、役になりながら物語と対話していく、役の心情を考えたり、相手とのやりとりを考えて演じていく、仲間との対話を通じて表現を作り上げていきます



大人の描いたシナリオをなぞっていたら自分達の世界は作れない、子ども達にゆだねることで表現は豊かになる。子ども主体の生活は豊かな表現を生み出していきます。

「7ひきのこやぎより」

（園長 廣部信隆）